■リポート■

タイに巨大な仏教施設「ブッダモントン」

――経蔵落慶式を厳修――

形山俊彦

世紀最大の仏教遺産

一九五七年、タイは国を挙げて仏紀二五〇〇年の式典を開催した。その前年、現在のプミポン国王はタイ王室の習慣に従って一時出家を行なった。タイは国民の九五%が仏教を信奉しており、これは一国としては最大の仏教徒人口である。王族や高官が一時的であれ出家し比丘としての修行生活を経験することが尊ばれている国はほかにない。タイは世界で最大の仏教王国といってよい。

そのタイ国政府と国民が一体となって計画した建造物が「ブッダモントン」である。仏陀を記念するためにこのような大事業が国家プロジェクトとして計画されたことは、熱心な仏教国ならではというほかない。プミポン国王は仏紀

二四九八（西暦一九五五）年七月二十九日、中心となる建造物の定礎式を自ら主宰して執り行った。

事業は建設委員会のもとで二年間、つまり仏紀二五〇〇年まで続けられるが、西暦一九七六年までの二十一年間は中断した。その後再開され、現在も工事は進行中である。しかし、すでに中心となる仏陀像や主要な施設は完成しており、全仏教徒に開放される国家施設「ブッダモントン」の全容が設備されるのは時間の問題とみられる。

「ブッダモントン」計画の目的は、この地を広大な仏教の総合センターとすることにある。バンコクから西へ約六〇㌔のところにナコン・パトムという町がある。伸びやかな田園風景が広がるこの地はタイに仏教が初めて伝来したところといわれ、古くから仏教の聖地として知られる。「ブッダモントン」はまさにこの土地を選んで計画されたものである。

敷地は二五〇〇ライ（およそ二・五㌔四方）という広さで中心部に高さ一六㍍の遊行の仏陀像が立つ。「ブッダモントン」のシンボルとなるブロンズ像で、著名な芸術家であるシルパ・ビラスリ教授がデザインした。一帯は竹林、マンゴーの林、ニグローダの林、タマリンダの林、シュロの林、繁用植物の林などの樹木が生い茂り、花の苑にはさまざまな草花が咲いている。池の周囲に緑の芝生を敷きつめた庭園が配され、さながら自然公園の趣である。

ここは仏教徒に安らぎの場所として開放され、さまざまな施設は仏教研究や瞑想と実践のセンターとして利用される。

点在する建物は、精舎、タイ様式の居住施設、長老のための住居、来訪者用の宿泊所、食堂付きの集会ホール、僧侶の食堂、円筒形の公共用ビル、通信報道関係者の会見センター、訪問者

休憩所、八つの瞑想ホール、二つの健康のためのホール、ブッダモントンの事務局支所、水道施設、什物保管庫、仏教図書館、博物館、そして経蔵。

「ブッダモントンは、仏教僧への供食や僧伽への供養などの功徳を積むために全ての仏教徒に開放されている」と解説書に記されている。午前五時から午後七時まで、訪問者は自由に敷地内へ入り、施設を利用することができる。

入場者が守らなければならない規則及び注意事項も定められているが、それは次のような、ごく基本的な事柄といってよい内容である。

「訪問者は相応しい服装であること」「この聖域内では威儀を正し、不謹慎な行動をとらないこと」「構内で自動車を運転したり、禁止された場所に駐車してはならない」「樹木を伐採し、また小枝を折ったり花を摘んではならない」「いかなる酒類も飲んだり販売してはならない」「動物を連れ込んだり放してはならない」「凧やグライダー、飛行機などを飛ばして遊んではならない」「地域内で写真やビデオを撮影してはならない」

ヴィーサカ（仏誕）祭やマカ（万仏）祭、アーサルハ（三宝）祭など仏教の聖日ばかりでなく、タイの伝統的な季節ごとの祝祭日、たとえば正月行事のソンクラーン、十一月の満月の夜のロイカトンの祭りなどにも、この場所で僧侶による説法が行なわれる。その時には仏殿で僧侶への食供養や祈りの行事が執り行なわれる。

ワットパクナムの偉業

これらの施設の中でもパーリ語蔵経（いわゆる南伝大蔵経）の経蔵は極めて大きな意味をもつ。石に刻まれた大蔵経は中国の房山石経が有名であり、また韓国の海印寺にある板木に刻まれた大蔵経は第一級の文化財として世界遺産に

経　蔵

指定されている。タイ国が政府と国民の力を合わせて大理石の板碑に経・律・論の聖典を刻んだ偉業は、後世に二十世紀最大の仏教遺産として伝えられるだろう。

特筆すべきは、「ブッダモントン」の諸施設の中でも、この経蔵と図書館はワットパクナムが手がけたということである。タイ仏教におけるワットパクナムの急成長ぶりがうかがえる。経蔵は完成までに十年の歳月を要している。大理石の板碑一枚一枚に一切経を刻む作業に多くの比丘たちが打ち込んだ。その過程はすべてカラー印刷された一冊の豪華な記念誌に記録されているが、一つ一つが入魂の仕事であった。

板碑の大きさは縦二㍍横一・一㍍。その数は七百九基。経文は碑の表と裏に刻まれているから、碑面は千四百十八枚を数える。経蔵の内部は森厳な空気がただよい、「碑林」という言葉が想起される。外の強い日差しは遮断され、涼し

い風が流れている。

見上げると、欄間の部分に極彩色の絵巻物が繰り広げられている。釈迦の前世物語であるジャータカ（本生譚）や仏伝、ワットパクナムの中興の祖から現住職に至る歴史、僧侶と多くの信徒が心を一つにして経蔵建立のために力を尽くす信仰の姿などが壮大な歴史絵巻として色鮮やかに描かれている。靴を脱ぎ、大理石のひやりと冷たい床を踏みながら堂内を歩くと、さながら極楽世界の回廊をめぐる聖者の気分にもなる。

経蔵の中心部に金色燦然たる仏塔を戴く大理石の仏殿があり、ドーム型の天井の真下にワットパクナム中興の祖、ロンポー（父）と呼ばれるチャオ・クン前住職をかたどったビルマ産大理石の等身大の坐像が安置されている。ロンポーは、ワットパクナムを〝托鉢の寺〟から〝瞑想の寺〟に変えた高僧である。

経蔵は、遊行の仏陀像の後方、湖に浮かぶ島の上に建つ幾何学模様の建物である。菱形をした藍色の屋根の組み合わせと、その中央に突き出した金色の仏塔のコントラスト。鮮やかに輝く全容は、湖の上に組み立てられた宇宙基地のようなイメージを与える。

経蔵落慶式典に日本人僧五人も参列

経蔵落慶の記念行事は昨年十二月二十九日から新年元旦にかけて執り行なわれた。スリランカやミャンマー、日本など海外からも僧侶が参列し、招待された日本人僧は、かつてワットパクナムで得度修行した経験を持つ高野山真言宗の高野山堀川別院主監・佐々木弘伝氏（京都市）、真言寺住職・資延憲英氏（北海道深川市）、開龍寺住職・教海俊應氏（岡山県笠岡市）、曹同宗の善光寺住職・黒田武志氏（横浜市）、日蓮宗の本

長寺住職・従野公徹氏（横浜市）の五人。

ワットパクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職から、わが子のようにかわいがられ、ワットパクナムへ留学僧を派遣するなど日本とタイの仏教交流に尽くしている善光寺の黒田住職は、壮大な「ブッダモントン」とパーリ蔵経の板碑完成の歴史的意義を日本から世界へ紹介しようと話合い、記念すべき式典に記者を同行させた結果がこのリポートである。

メーンの式典は十二月二十九日と三十一日の二日間にわたって挙行された。両日ともタイ全土から五百人ずつ延べ千人の僧侶が参集する盛儀で、随喜した在家信徒は数千人にのぼったと見られる。

プラ・マハージャマンガチャラ住職は在家信徒に五戒を授け、ロンポーの業績を偲び、説法が行なわれ、仏殿を埋めた五百人の黄衣のタイ人僧がいっせいに読経した。

読経が終わると、信徒たちは僧侶に法衣と記念品を施した。タン・ブン（積徳）と呼ばれるタイの供養の姿である。さらに、八万四千個の小さな仏像のお守りを求めて布施し、そのお守りを願い事と一緒に空中ケーブルで仏塔内に奉納する。仏教に救いと安楽を求める信徒たちの無数の願いが込められた。

巨大な信仰エネルギー

タイの仏教を垣間見るたびに多くのことを考えさせられる。第一に日本仏教との比較である。上座仏教のタイと、極大乗といわれる宗派仏教の日本仏教とを安易に比べることが危険であることは承知している。しかし、いま考えようとするのは、仏教史の流れとして上座部から大衆部が生まれてゆく時間的経過をなぞることではない。

タイ仏教も、あるいはスリランカやミャンマ

ーの仏教も、中国や韓国やチベットの仏教も、過去の歴史の中に位置づけて考えるのなら、それぞれが異質のものでしかない。そうではなくて、視点をこの二十世紀に同時存在している仏教のあり方としてとらえてみることはできないかということである。

タイの仏教と日本仏教の根本的な違いは、いうまでもなく戒律の問題にある。戒律が守られ、それによって僧伽が維持されているからこそ、仏法僧の三宝は篤く敬われている。僧侶に供養し、タン・ブンすることに対して、タイの人たちは無条件の帰依とも見える熱意を見せる。施すことが喜びであることこそ豊かさといえるものではないだろうか。

「ブッダモントン」に注がれた政府と国民の信仰のエネルギーは、人間が生きていくことの意味や喜びの所在を改めて教えてくれているように思える。